

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19401010  
 研究課題名(和文) スマトラ河川流域社会の 20 世紀：比較と定点継続調査を基軸とする学際的研究  
 研究課題名(英文) Riverine Societies of Sumatra and Their Experiences of the 20<sup>th</sup> Century: An Interdisciplinary Study from Comparative and Longitudinal Perspectives  
 研究代表者  
 加藤 剛 (KATOU TSUYOSHI)  
 龍谷大学・社会学部・教授  
 研究者番号：60127066

研究成果の概要(和文): フィールドワークと文献調査に基づき、インドネシアのスマトラ島中央部を流れるインドラギリ川の原流域シンカラ湖地域と、中流域のタルック地域、下流域のトゥンピラハン地域を調査・比較し、20 世紀の河川流域の社会史の再構築を試みた。内陸原流域に比べて下流域は民族的・文化的に多様であり、外世界の影響を強く受けていること、内陸における交通通信インフラの整備や現在進行中のグローバル化、地域分権化を考えると、かつてのような河川流域社会間の有機的関係の再現は困難であるとの結論である。

研究成果の概要(英文): Based on fieldwork and literature survey, the project aimed to reconstruct a social history of interactions between three riverine regions along the Indragiri in Central Sumatra of Indonesia, namely, the Lake Singkarak area in the upstream, the Taluk area in the midstream, and the Tembilahan area in the downstream. It is concluded that the Tembilahan area, which is susceptible to outside influences, is culturally and ethnically much more heterogeneous than the Lake Singkarak area and that it is no more possible to see the reemergence of organic interdependence between the three riverine regions, given the development of land-based transportation systems, and ongoing globalization and politico-administrative decentralization.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	5,200,000	1,560,000	6,760,000

研究分野：比較社会学、東南アジア地域研究、社会史

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア島嶼域・河川流域社会・海域ネットワーク・国民国家・インドラギリ川

## 1. 研究開始当初の背景

F・ブローデルの地中海世界の研究に触発され、A・リードが *Southeast Asia in the Age*

*of Commerce Volume 1* を発表したのは 1988 年のことだった。それ以来、東南アジア研究には新たな潮流がみられる。民族社会、王国、

国民国家等の境界を前提とする研究とは別に、これら境界を貫く関係性とネットワークの研究、中でも海域世界の研究である。これらの研究は、東南アジア海域世界が 15 世紀末以降に世界システムに位置づけられてより、ヨーロッパや中国の政治状況・市場動向に連動しダイナミックに展開した東南アジア海域世界の動態を描き出している。しかしながら、研究対象の多くは欧米語と中国語文献が豊富な港市国家を中心としており、研究も海域世界そのものに集中した歴史研究で、B・ブロンソンが 1977 年に川筋モデル（別掲図参照）を提示したにもかかわらず（Bronson, B. 1977, "Exchange at the Upstream and Downstream Ends," in *Economic Exchange and Social Interaction in Southeast Asia*, edited by K.L. Hutterer, Center for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan）その後、実際に海域と内陸との関係を扱った研究は少ないままにとどまっている。その理由のひとつは、河川流域間関係に言及する文献は限られており、それを補うためにはフィールドワークに基づく実証的な研究が必要とされるからである。結果として、島嶼域の歴史研究と現代研究との間に分節化が生じている。本研究は、このような状況の反省のもと、河川流域社会の 20 世紀を中心とする変容に着目することによって、東南アジア島嶼域研究への新たな視点の提示を試みたい。

## 2. 研究の目的

本研究が対象とする東南アジア島嶼域では、歴史的に河川流域沿いの生態的ニッチに多様な民族社会が形成され、その社会生態的多様性が、河川を媒介とする後背地（食糧、工芸品、商品作物、金などの産地）と沿岸交易都市との関係性を担保していた。それというのも、道路や馬・馬車が稀であった島嶼域で、沿岸と後背地を結んだのは河川だったからである。この状況に構造的な再編を迫る大変化が起こる端緒は、19 世紀末～20 世紀初頭以降に本格化した島嶼域の植民地主義的領域支配である。領域国家の形成は、第 2 次世界大戦後の国民国家誕生後にさらに促進され、河川沿いの民族社会は、河川とその先に広がる海域ネットワークのトランスナショナルな関係から引き離され、国民国家の首都を中心とするナショナルな網の目に包摂されるようになった。この点で決定的に重要だったのは、自然条件の障害を貫いて構築された交通通信網の発達、中央集権的行政機構と暴力装置の整備、国民経済の形成、国民意識の醸成だった。

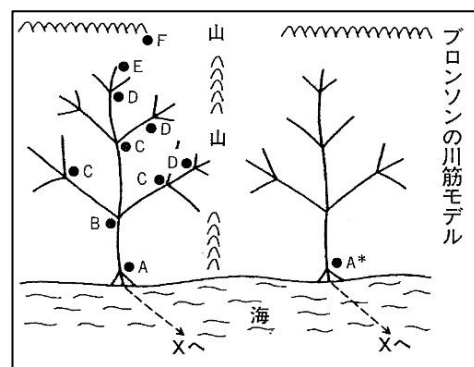
以上のように要約できる 20 世紀東南アジア島嶼域の河川流域社会の変化は、これまで

一般的なレベルで記述されることはあっても、フィールドワークに基づき実証的に研究されることはなかった。これは、特に、特定の河川流域諸社会を上流から下流まで通観し、比較検討する研究が欠如しているという点において顕著である。

本研究は、東南アジア島嶼域河川流域社会の例として、インドネシアの中央スマトラを西から東へ流れるインドラギリ川を取り上げる。インドラギリ川は、島嶼域の重要な後背地のひとつ、ミナンカバウ高地に源流を発し、東西交渉の要路・マラッカ海峡に向けて流れる。本研究では、この川沿いの上流、中流、下流の 3 地域の社会に焦点を当て、20 世紀という時代の中で当該社会がどのように変化し、現在どのように変化しつつあるかを、3 地域間の関係性や外世界との関係に注目することによって、広くは国民国家の時代からグローバル化の時代にかけての東南アジア島嶼域社会の変容過程の特徴を、社会学者（研究代表者・加藤剛）、生態学者（研究分担者 [H19 H20 連携研究者]・阿部健一）、歴史学者（研究協力者・グスティ=アスナン）の協働により学際的に解明しようとするものである。

## 3. 研究の方法

ブロンソンの川筋モデルを下敷きに（下図参照）調査地域としては加藤がインドラギリ川中流域のタルック地域を、阿部が下流域のトゥンビラハン地域（両地域ともリアウ州）を、グスティが上流域地域のシンカラ湖地域（西スマトラ州）を担当し、相互の調査結果や収集資料をお互いにフィードバックする形で取り組んだ。



フィールドワークは、上記の 3 地域とともに、マラッカ海峡を挟んでインドラギリ川下流域と関係の深いシンガポール及びマレーシアにおいても行い、いずれの地においても参与観察、聞き取り、資料収集などを実施した。フィールドワークにおける眼目のひとつは、各地域における個人史の聞き取りで、これにより大きな社会史と個人史の交差をみるこ

を通して、河川流域社会の変容を「立体的」に再構築しようと試みた。また、オランダ植民地時代と独立後の文書や新聞、雑誌、写真の収集をジャカルタの文書館とアメリカのコーネル大学オーリン図書館ならびにウィスコンシン大学中央図書館にて行っている。

#### 4. 研究成果

計画通り、調査は下図の3つの地域を中心に行われた。



インドラギリ川沿いの3調査地域

研究成果としての知見は、以下のように要約できる。

(1) 19世紀前半に西スマトラがオランダによって支配され、中央スマトラにおける陸上交通路の整備が開始される以前の時代にあっては、この地域における主要交通は踏み道と河川を通じたものだった。この時代、西スマトラのミナンカバウにとって、インドラギリ川はマラッカ海峡への重要交通路であり、中流域のタルック地域も16世紀以降ミナンカバウ移住者によって漸次開拓されたものである。したがって、民族的・文化的にタルック地域は「ミナンカバウ世界」に包摂される存在だった。他方、より下流のトゥンピラハン地域には、上流から下ってきたミナンカバウだけでなく、マレー半島のマレー人、スラウェシのブギス人、カリマンタンのバンジャール人などが移り住み、各々の民族の特性を生かして、漁業、ココヤシ栽培、潮汐灌漑農業、商業、海運業などの多様な生業に従事し、「移民」から構成される「多民族社会」を形成していた。

(2) 19世紀前半から20世紀初頭にかけてオランダによる中央スマトラの植民地化が進展するなか、まず19世紀前半に植民地政

庁によるスマトラ西海岸州（現在の西スマトラ州）の設置があり、次いで20世紀初頭に「リアウおよび属領州」（現在のリアウ州の母体）の設置がなされ、上のような状況に根本的な変化が生じた。シンカラ湖地域は西スマトラ州に位置づけられ、西海岸の港町兼オランダ植民地行政都のパダンとの関係を深めていった。他方でトゥンピラハン地域と中流域タルック地域はリアウ州に囲い込まれた。つまり、インドラギリ河川流域の3地域社会は行政機構の線引きによって分断されてしまったのである。にもかかわらず、タルック地方の人々の意識のなかではミナンカバウ・アイデンティティが保持され続け、この傾向は加藤がフィールドワークで話を聞くことができた80歳以上の古老の間ではいまだ「健在」だった。植民地時代でさらに特筆すべきは、1910年代～30年代のタルック地域ならびにリアウ地域全般におけるゴム・ブームである。「木に成る金（きん）」とも称されたゴムが招来した経済ブームに引かれ、多くのミナンカバウ商人やイスラム教師、ゴム・タッパーがクアンタン地域に流れ込み、19世紀半ば以降途切れがちであったミナンカバウのタルックへの関心を再び喚起した。

(3) 日本軍政期（1943～45）、独立戦争期（1945～49）にはスマトラの陸上交通網が破壊・寸断され、河川交通の重要性が復活した。加えて1950年代初頭の朝鮮戦争によるゴム・ブームの再来があり、戦前期のゴム・ブーム以降にみられたミナンカバウのタルック地域に対する関心は維持されたのである。付言すると、49～57年までリアウは中央スマトラ州の下部行政単位と位置づけられ、州都が置かれた西スマトラのプキティンギから統治された。この時代は、タルックだけでなくリアウ地域一般の人々が、当時、文化的・経済的により進んでいたミナンカバウによって政治的・社会的に差別的扱いを受けたと感じた時代だった。つまり、タルック地域の人々のミナンカバウに対する感情が従来よりも複雑なものとなったのである。1957年に中スマトラ州が西スマトラ州、リアウ州、ジャンピ州として分立した裏には、このような差別を屈辱と感じた一部リアウ出身政治家（これにはタルック出身者も含まれていた）の働きかけが存在していた。

(4) タルックとミナンカバウとの文化的・民族的関係に大きな変化が生じるのは、スハルト時代の文化政策の影響による。多民族国家統一の促進や観光資源掘り起こしのために、州別のエスニック・アイデンティティの同定を進めた文化政策の下で、1980年代半ば以降、リアウ州の公定エスニック・アイデンティティはマレーだとされた。これにより、タルック地域の文化的アイデンティティが

ミナンカバウからマレーへとシフトするようになり、これは特に州政治・ナショナル政治から恩恵を受けた若い世代の村レベルの政治エリートや州都プカンバルで活躍するタルック出身の政治家・インテリの間で顕著に見られた。他方、下流域のトゥンピラハン地域は、1960年代前半のシンガポール、マレーシアとの対決政策以降、その関係性を国民国家の境界内に封じ込められ、かつて海域世界に見られたようなトランスナショナルな関係を維持・発展させることは許されなかった。

(5) 上の状況が再び大きく変わるのは、1990年代後半のスハルト強権政治の終焉と地方分権化政策の推進、そして中国市場の勃興以降のことである。すなわち、地方分権化政策の下でもリアウ州全体の公定エスニック・アイデンティティがマレーであることに変わりないが、タルック地域はクアンタン・シンギンギ県(タルックは町の名前で住民はクアンタン人とされる)として独自の行政単位を州の下に形成するに至り、現在では「クアンタン人」なる文化的アイデンティティを主張し、ミナンカバウとは区別される独自の歴史物語を紡ぎ始めている。下流のトゥンピラハン地域はといえば、スハルト期の中央集権的統治から解放され、再びシンガポールとの関係を深めるようになっていく。例えば、中国市場におけるツバメの巣の需要増大を受けて、シンガポールの華人がトゥンピラハン地域に多く資本を移植するようになり、2000年頃から海燕を団地スタイルの建造物に呼び入れ巣作りをさせることによって、ツバメの巣の大量生産が始まっている。巣はシンガポール経由で中国に輸出される。いまやトゥンピラハン地域では外世界との通信のために、携帯電話の活用が不可欠となっている。

(6) この間、上流域のシンカラ湖地域はどうなったかということ、スマトラの陸上交通網が整備されたスハルト期には、リアウ州、就中、州都プカンバルとは河川ではなく道路や空路を介して結ばれるようになった。逆にタルック地域やトゥンピラハン地域との関係はきわめて希薄となってしまっている。スハルト期には、「石油の都」プカンバルに代表されるリアウ州はミナンカバウ出稼ぎ・移住者にとってきわめて魅力的な地であり、これは地方行政に自然資源からの収入が多く配分されるようになったポスト・スハルト期にはなおさらのことである。こうした影響から、かつては出稼ぎ人意識が強かったプカンバルなどのミナンカバウは、いまや「リアウ・ミナンカバウ」なるアイデンティティを打ち出し、急成長を続けるリアウ州のステークホルダー住民としての地位を確立しようとしている。

(7) 以上が本研究で得られた知見の概略であり、歴史とともに大きく変容した河川流域社会の相互関係を、20世紀を中心にして動的に描くことができたと思っている。なお、上では細かく記述することができなかったが、本プロジェクトの特徴のひとつは、河川流域の社会史を上記3地域に住む人々の個人史を織り込みながらまとめようとするところで、このように地域、社会、個人の歴史的相互交渉を河川流域に沿ってまとめようとする試みは世界的にみても類をみない試みといえる。河川流域社会の相互関係・相互交流の重要性が急速に失われつつある今日、本研究の成果は、時とともに歴史的価値を増すことであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

及川 洋征、アルディ ユフス、阿部 健一、  
『『燕の巣』とスマトラ低湿地の開発』『熱帯林業』(査読無)、70号、2007、pp.39 - 44.

[図書](計12件)

長津 一史、加藤 剛編、風響社、『開発の社会史 東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』、2010、540pp.  
(加藤 剛、「インドネシアの政治過程と地域アイデンティティの生成」、pp.391 - 435.)

加藤 剛編、世界思想社、『もっと知ろう!!わたしたちの隣人 ニューカマー外国人と日本社会』、2010、272pp. (加藤 剛、「はじめに ニューカマー外国人と二一世紀の日本社会」、pp.1 - 32.)

阿部 健一、勉誠出版、「それぞれの水問題 水の文化多様性と世界水フォーラム」、秋道智彌、小松 和彦、中村 康夫編、『人と水 水と環境』、2010、pp.307 - 332.

ABE Ken-ichi, James Nickum, eds., Kyoto University Press, GOOD EARTHS: Regional and Historical Insight into China's Environment, 2009, 318pp.

阿部健一、昭和堂、「地産地消費から知産知消へ つながりという「関係価値」」、窪田順平編、『モノの越境と地球環境問題』、2009、pp.180 - 211.

KATO Tsuyoshi, Aysun Uyar, eds., Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku University, Proceedings of the Fourth Afrasian International Symposium: The

Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution, 2009, 274pp.

ベネディクト・アンダーソン著、加藤剛訳、NTT 出版、『ヤシガラ椀の外へ』、2009、300pp.

阿部健一、弘文堂、「地域住民と国家のあいだ：メコン流域の森林資源管理」、秋道智彌編、『モンスーン・アジアの生態史 地域と地球をつなぐ』、2008、pp.230 - 242.

ABE Ken-ichi, Wil de Jong, Deanna Donovan, eds., Springer, Extreme Conflict and Tropical Forests, World Forests Volume V, 2007, 184pp.

阿部 健一、弘文堂、「グローバル・コモンスという考え方 熱帯林史試論」、秋道智彌編、『資源人類学 08 資源とコモンス』、2007、pp.309 - 341.

加藤 剛編、NTT 出版、『国境を越えた村おこし 日本と東南アジアをつなぐ』、2007、202pp. (加藤 剛、「はじめに グローバル化時代のローカルなつながりを求めて」、pp.iii - xxvi.) (阿部 健一、「小さな国」東ティモールの大きな資源 みんなで考えるコーヒー豆の活かし方」、pp.1 - 29.)

阿部 健一、放送大学教育振興会、「資源のマネージメント - 熱帯林の資源管理」、内堀 基光、菅原 和孝、印東 道子編、『資源人類学』、2007、pp.162-175.

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

加藤 剛 (KATOU TSUYOSHI)  
龍谷大学・社会学部・教授  
研究者番号：60127066

### (2)研究分担者

阿部 健一 (ABE KEN-ICHI)  
総合地球環境学研究所・研究推進戦略センター・教授  
研究者番号：80222644  
(H19 H20 連携研究者)

### (3)連携研究者